





## 学校での実際の実践について

北杜市立白州小学校は山間部に位置しており、全校児童数が141名の小規模校である。学区域が広範囲にわたるため、徒歩で登下校することが難しい児童も多く、児童の約半数がスクールバスで通学している。さらには、児童数の減少から、放課後に友達と遊ぶ機会も減っており、スポーツ少年団等への加入率も減少している。このように、学校では児童の運動実施時間が少ないことや、運動やスポーツに触れる機会が減っていることについて課題があると考えており、これらの解決のために本事業に取り組むこととした。

### 準備・打ち合わせ 8時から8時30分(30分程度)

教員、地域の協力者、保護者等が集まり、その日に行う取組の内容や目的等の確認を行っていた。特にそれぞれの遊びのルールや、起こりうるケガ等も考慮しながら注意点の確

認を入念に行っていた。

なおこの日は、今後子供たちだけでなくこのような遊びを行えるようにするために、ラインを引いたり、道具を準備したりする作業を子供たち自らが行うように促し、一緒に準備する姿が見られた。この準備の時間に、会話を通して体調や意欲等を確認している。子供たちが、教員、地域の協力者、保護者と積極的にコミュニケーションをとっている姿が印象的であった。

### 元気アップタイム 8時30分から8時45分(15分)

8時25分頃にバス通学の児童も含め、全員が登校してくる。子供たちは、すぐに荷物を置いてグラウンドに集合してくるなど、この時間を楽しみにしている様子がみられた。子供たちからは「今日はどんな遊びをするの?」「早くやろうよ」というような声も多く聞こえてきた。

実際の活動は、低学年、中学年、高学年に分かれて、各ブースにいるリーダーが遊びのルールや注意事項等を2、3分程度の短い時間で説明することで始まった。取組の間は、教員、地域の協力者、保護者が連携をとりながら、困っている子供にかかわるなど、スムーズに活動が進行していた。

### 本時の反省・次回の確認 8時45分から8時50分(5分)

本時の活動内容、児童の様子をふり振り返りながら、教員、地域の協力者、保護者で反省会を行っていた。地域の協力者からは、子供たちの様子を見て、もう少しゲームの修正をしたほうが良いのではないかとというような意見が出されていた。

### 高学年担当の反省会の様子

本時の活動で「コート内の人数が多くて走り回れない」、「同じ場所に



▲元気アップタイムの様子

止まってしまう動きが少ない」、「同じリバーシコマを何回も返している」というような意見が担当者から出され、それに関する改善点の話合いが行われた。その後、「もう1、2コート増やす」、「一度返したコマを連続で返してはいけない」ということが次回に向けて確認された。



▲反省会の様子

## 学校の声

### 取組についての感想

(参加した子供)

- ・今までやらないような遊びをするようになった。
- ・大きい子供が小さい子供の面倒を見るようになった。
- ・スポーツ少年団で練習前、練習後等空いた時間に複数人でこれらの遊びを行うようになった
- ・女子でも自分たちでルールを工夫するようになった。
- ・Sケンを通して「ケンケン」ができるようになった。

(教員や地域の協力者、保護者)

- ・学校・家庭・地域のコミュニケーションが非常に取りやすくなった。
- ・ふだんの子供の様子を観察できて、家庭や地域での生活にも参考になった。
- ・学校行事への参加率がほぼ100%になった。また、地域の方々も学校行事へ参加してくださるようになった。
- ・この取組で取り扱った遊びを、体育の授業への導入やスポーツ少年団等の活動でも行うようになった。

## まとめ

### 子供のニーズに対応した学校での取組を 家族や地域に受け渡す仕組みを整える

レクで学校丸ごと元気アップコンソーシアムの取組は、子供たちの運動を行ってみたいというニーズに対応したものであった。遊びを中心としているため、子供たちが夢中になって遊んでいると、いつの間にか汗だくになるほどの運動を行っている。子供たちの「もっと遊びたい」という気持ちを上手に育み、学校での取組を自然に家庭や地域に受け渡

す仕組みづくりを行っている。

遊びのプログラムを提供するレクリエーション協会、大学生を中心とした人材を派遣する大学、そして学校での取組をサポートする教育委員会、この3者がコンソーシアムの構成団体としてそれぞれの役割を果たし、子供の体力の向上のために得意分野で機能している。これは他地域においても十分参考になる取組であ

ると思われる。

これからの課題としては、取組の内容について、いかに県内に浸透させることができるか、また家庭や地域での取組を継続させるために、さらに他団体等との協力体制を構築させることなどがあげられよう。今後、同様の取組が増え、今よりももっと体を動かして遊ぶ子供が増えていくことを期待している。